

ワークショップ

真正で探究的な学びを実現するパフォーマンス課題とは

開催日

2024 年 8 月 21 日（水）13:00-16:00

開催場所

京都大学総合研究 3 号館 講義室（共通 155）／総合研究 4 号館 講義室

参加人数

小中高等学校教員、教育委員会関係者、大学教員等 89 名
（国語科 44 名、理科 17 名、社会科 28 名）

後援

国立研究開発法人科学技術振興機構

実施の様子

京都大学大学院教育学研究科 教育実践コラボレーション・センター E.FORUM では、2024 年 8 月 21 日（水）に、京都大学吉田キャンパスにおいて、ワークショップ「真正で探究的な学びを実現するパフォーマンス課題とは」を開催しました。北は北海道から南は沖縄県まで、総勢 89 名の教職員や教育委員会関係者の方々が参加してくださいました。なお、本ワークショップは、内閣府による SIP（戦略的イノベーション創造プログラム）の課題「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」（サブ課題A「新たな『学び』」のデザイン開発）における研究開発「真正で探究的な学びを実現する教育コンテンツと評価手法の開発」（研究開発責任者：松下佳代）の一環として行われました。

はじめに、全体会を総合研究 3 号館 講義室（共通 155）にて開きました。全体会では、司会進行を石井英真准教授が行い、サブ課題Aのサブプログラムディレクターである西岡加名恵教授より、SIP「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」についての紹介がありました。続いて、サブ課題A・研究開発責任者である松下佳代教授より「真正で探究的な学びを実現する教育コンテンツと評価手法の開発（AICAN）」の趣旨説明が行われました。

次に「教科におけるパフォーマンス課題を生かしたデジタル・コンテンツと評価手法の開発」と題して、奥村好美准教授よりパフォーマンス課題や逆向き設計論についての解説がありました。また、これらの解説を踏まえ、パフォーマンス課題を生かした具体的なデジタル・コンテンツの例として、小学校 5 年生理科のパフォーマンス課題「風力最強のハンディファンをつくろう！」の動画が紹介されました。続いて、TOPPAN 株式会社の水越駿氏より、デジタル・コンテンツと評価手法の開発にあたって、TOPPAN 株式会社の担う役割について説明があ

るとともに、開発したデジタル・コンテンツを使って実際に授業実践をしていただける実証校募集の呼びかけが行われました。



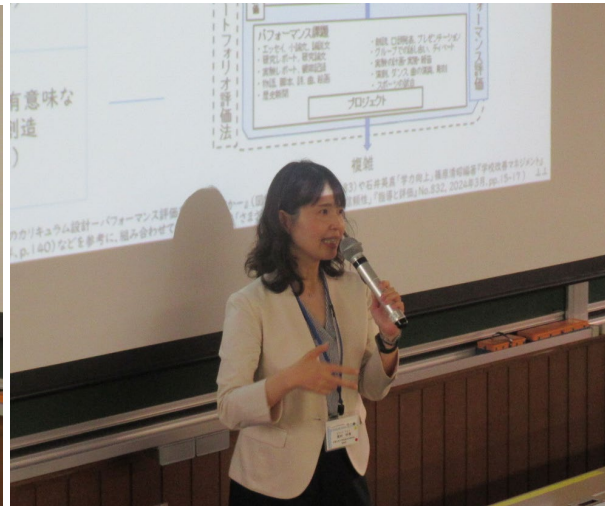
石井英真准教授（司会）



西岡加名恵教授
（サブ課題Aサブプログラムディレクター）



松下佳代教授
（サブ課題A・研究開発責任者）



奥村好美准教授



全体会の様子



水越駿氏（TOPPAN 株式会社）

全体会終了後は、国語科・理科・社会科の 3 教科の分科会に分かれて、ワークショップを行いました。以下に各分科会の様子をご報告します。

国語科は、本プロジェクトの共同研究者である大阪教育大学の森本和寿特任講師が担当しました。「国語のパフォーマンス課題づくり、初めてのその次」と題して、5 年生の単元「和の文化を発信しよう」を例にして、前半にパフォーマンス課題づくりについて講義を行い、続いて、大阪教育大学附属池田小学校の池住祐亮指導教諭を交えて、理論（抽象）と実践（具体）を往還しながらの目標づくりについてディスカッションと質疑応答を行いました。後半は、これまでの講義と議論を踏まえ、グループに分かれて目標づくりのワークショップを行いました。最後に、グループでの話し合いの結果を全体で共有しました。



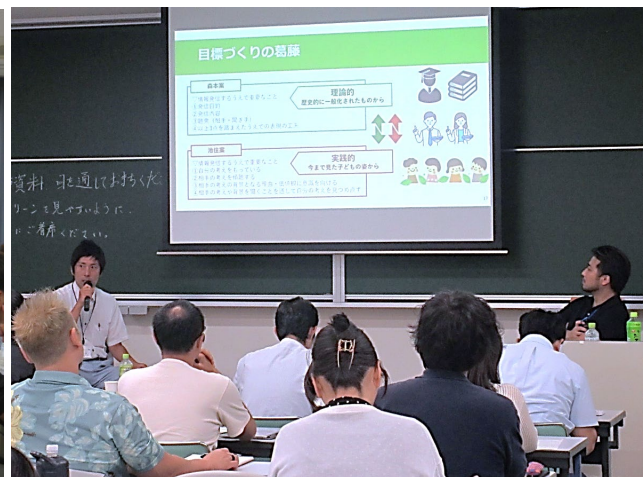
森本和寿 特任講師 (大阪教育大学)



グループディスカッションの様子



質疑応答の様子



左) 池住祐亮指導教諭 (大阪教育大学附属池田小学校)

参加者からは次のような感想が寄せられました。

- ・パフォーマンス課題を考える時に、「本質的な問い」と「永続的理解」は大事だけれども、子どもの実態と乖離しないように考えることが大事だということ [が最も印象に残った]。

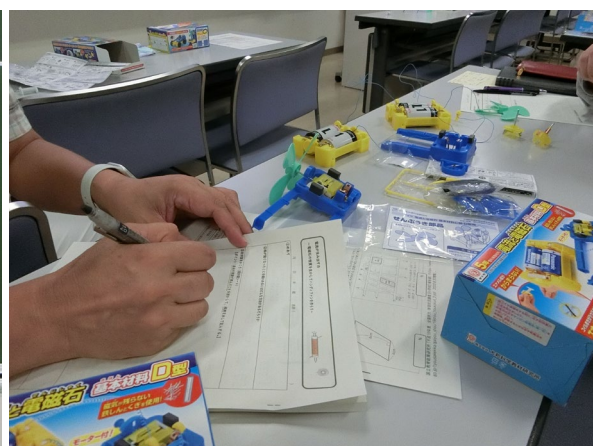
- ・ゼロから新しいものを作るというよりも指導要領で求められる目標を変化させながらパフォーマンス課題をつくっていくという過程を少しだけ体験できてよかったです。また上手なパフォーマンス課題の how to があるわけではなく現場の先生が悩みながら挑戦していることに少し安心しました。
- ・[最も印象に残ったことは] 企業とのコラボレーションにより、各教科等の学びのコンテンツ作成が進んでいることです。単元構想の考え方は千差万別で、先生ごとにあると言っても言い過ぎではないと思います。可能な限り全国に共有され、先生方の負担を低減出来るようになるといいなと思っています。
- ・国語では、「永続的理解」や「本質的な問い」というのが、特に文学作品においては非常に設定が難しいと感じる。分科会では「比喻について学ぶ」などの具体例が出されていたように思うが、そこから一步進んで、分科会でも言われていた問いの「切実性」＝日常生活や人生に繋がるような、児童生徒の「生」に関わる内容が問われているのだと感じた。そして、その「切実」な内容が文学で扱われてはいても、生徒の経験値や成熟度、また個々が置かれている状況によって、その扱いは非常にきめ細かな配慮が必要だという一面がある。



理科は、本プロジェクトの共同研究者である愛知県立大学の大貫守准教授が担当しました。「理科におけるパフォーマンス課題とルーブリック」と題して、前半は、理科におけるパフォーマンス課題についての講義を行いました。学んだ知識を異なる状況に適用することの難しさを踏まえた上で、理科におけるパフォーマンス課題づくりの課題について検討しました。後半は、全体会でも紹介された電磁石の単元のパフォーマンス課題「風力最強のハンディファンをつくろう！」の動画を確認しながら、グループごとに風力最強のハンディファンの設計図を実際に作成するワークショップを行いました。最後にルーブリックづくりの解説をして終わりました。



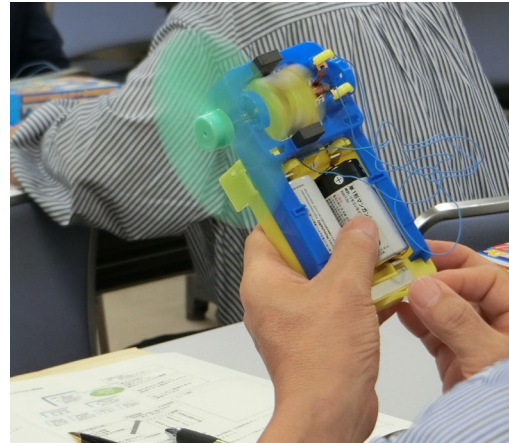
大貫守 准教授（愛知県立大学）



設計図作成に取り組む様子



風力最強のハンディファンを実演する参加者たち



ハンディファン

参加者からは次のような感想が寄せられました。

- ・児童・生徒は学習内容の転換が実は難しく学力テストなどでそれが如実に現れているという点 [が最も印象に残った]。知識の活用や日常生活への応用に目を向けて欲しいと思うので、授業の内容を考えようと思った。
- ・パフォーマンス課題によって、子どもたちの学びが「知っている」だけではなく、知識を組み合わせることによって深化につながるということや、次への探究する問いにつながることの大切さを新たに私自身学びました。
- ・ハンディファンの仕組みや改良などをしていく中で、知識・概念の習得や活用がなされていくということを単元の中で子どもの学びの文脈に即して設定しているところが印象に残った。
- ・パフォーマンス課題を解決していく際に、必ず色々な子どもたちの協力が必要になり、子どもたちを学びの中で自然につなぐことができると感じました。そして教師が何より楽しんで子どもたちの発想を楽しめるだろうと思います。



社会科は、本プロジェクトの共同研究者である弘前大学の若松大補助教が担当しました。「子どもたちが動き出すとき——魅力的な社会科パフォーマンス課題を探る」と題して、前半で社会科のパフォーマンス課題の理論と実践を紹介するとともに、社会科のパフォーマンス課題をめぐる論点（①「真正性」をどう捉えるか、②「切実性」をどう保障するか、③「地域」に依存しないよい教材・課題の条件とは何か）について検討しました。後半は、これらの論点を踏まえて、現在、開発中の単元「情報を活かして発展する産業」のパフォーマンス課題「情報（データ）の力で〇〇食堂を立て直そう！」について、グループに分かれて、批判的検討を行うとともに、参加者それぞれが考える魅力的なパフォーマンス課題について意見交換を行いました。



若松大輔 助教（弘前大学）



意見交換の様子



参加者からは次のような感想が寄せられました。

- ・パフォーマンス課題には取り組んでいるところなので、「本質的な問い」や「永続的理解」をもう少し明確に設定したり、可能な限り「本質的な問い」を問わざるを得ないような文脈を想定して、実践に移したいです。
- ・教科ごとのパフォーマンス課題作成の具体例に数多く触れられたこと [が最も印象に残った]。
- ・パフォーマンス課題をめぐる論点として、「切実性」をどう保障するかということ [が最も印象に残った]。学問の営みとしては「切実」であったとしても、生徒の日常からは乖離していて、生徒が前のめりで取り組むことができないということはよくあります。
- ・妥当なパフォーマンス課題を設定する難しさに加え、授業時間数が限られているためパフォーマンス課題を実践する時間をどのように確保するか、複数の教員で担当している科目について評価基準をどのように一致させるか、学校に行きづらい（不登校傾向の）生徒がいた場合にどのように対応するのか等の難しさを感じます。



全体を通して、参加者から「いろいろな校種や経験を持った先生方と話すことができ、有意義であった」「講師陣とフラットに対話でき、他の学校の先生とも交流できた」「全体会で概要を確認し、分科会で各教科に分かれたのは良かった」等、参加者同士の交流や講義とグループワークという構成に好意的な感想が寄せられました。また、本ワークショップで学んだ内容を学校現場等で活用する際の難しさとして「時間の確保、他の教員の理解と協力体制」といった声も多く寄せられました。

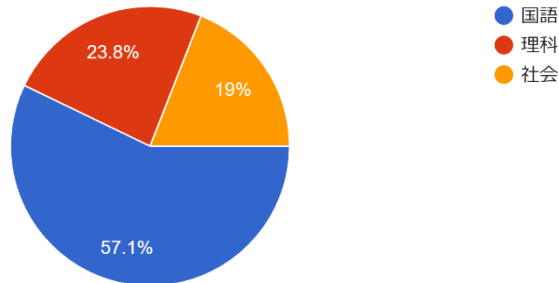
今後 E.FORUM に提供してほしい研修内容としては、パフォーマンス課題の実践例についての紹介や実際にパフォーマンス課題を作る研修、またデジタルポートフォリオやデジタルコンテンツについても関心が寄せられました。このほか、今回のワークショップは小学校の内容が中心だったため、高等学校での事例紹介を期待する声もありました。

E.FORUM では、今後も実践に役立つ知見を得られる、楽しくて元気の出る研修を提供していきたいと考えております。今後ともご支援のほど、よろしくお願いいたします。

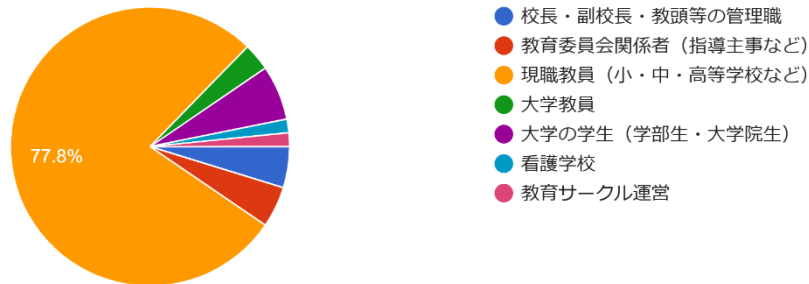
※文中の [] 内は、作成者による補足です。

【参考】アンケート結果（一部抜粋）

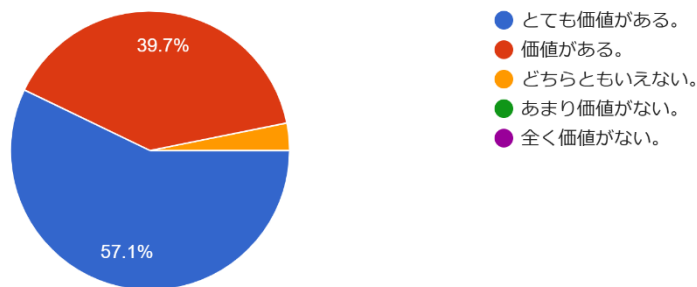
1. 今回、参加された分科会をお教えてください。
63 件の回答



2. どのような立場で参加されましたか？
63 件の回答



3. 本研修に対するあなたの評価にあてはまるものに、チェックを入れてください。
63 件の回答



5. E.FORUMの研修や講演会等に、これまで何回、参加されましたか？
63 件の回答

